

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

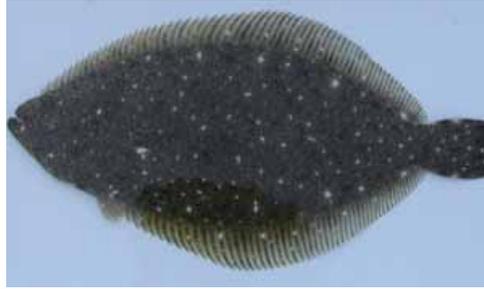
[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

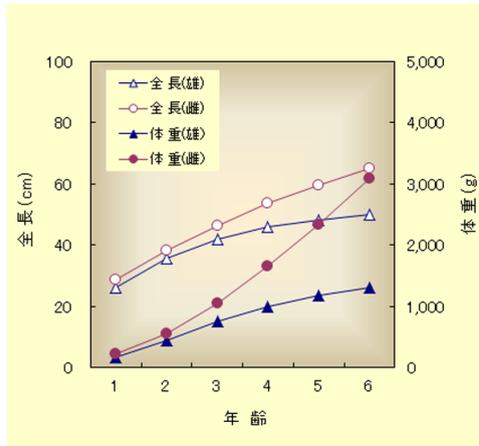
系群名 日本海北・中部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 15歳程度
 成熟開始年齢： 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場： 3～7月、水深50m以浅
 索餌期・索餌場： 青森県津軽半島西岸から兵庫県沿岸の水深150m以浅
 食性： 着底後は主にアミ類、全長10cm以上では魚類が主食、他にはイカ類、エビ類等
 捕食者： 稚魚期にはより大型のヒラメをはじめマゴチ、オニオコゼ、アナハゼ、イシガニ、エビジャコ等

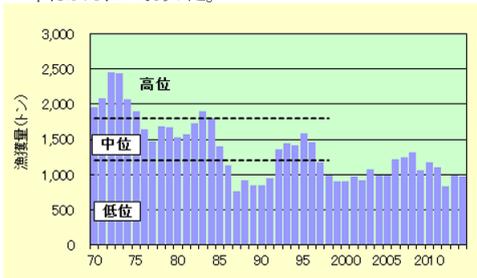


漁業の特徴

主に刺網、定置網、底びき網などで漁獲され沿岸漁業の重要な対象種である。栽培漁業の代表的対象種でもあり、1980年前後より分布海域において種苗の放流が行われている。2013年には270万尾の人工種苗が放流され、1歳の放流魚の混入率は10.8%、添加効率(放流魚の漁獲加入までの生残率)は0.056と推定された。

漁獲の動向

漁獲量は、10数年周期で増減を繰り返し、減少傾向にあったが、2000年以降は1,000トン前後で推移している。2014年は973トンであった。



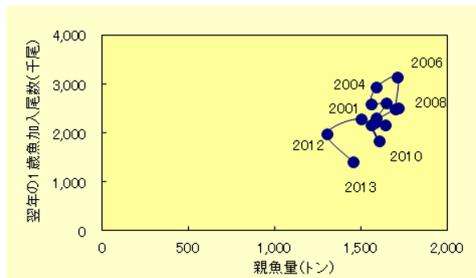
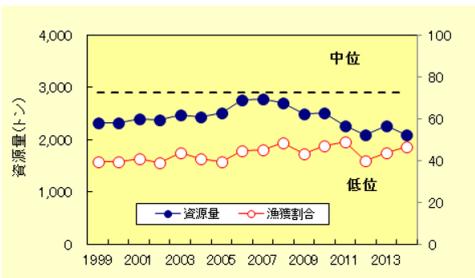
資源評価法

1999～2014年の年齢別漁獲尾数を基に、コホート解析により資源量を推定した。自然死亡係数は、安達(2007)に従い0.2とした。5歳以上をプラスグループとし、4歳魚と5歳以上魚の漁獲係数は等しいと仮定した。2014年の1～4歳魚の漁獲係数には各年齢の直前3年間(2011～2013年)の平均値を用いた。

資源状態

資源量は1999年以降緩やかに増加していたが、2007年以降は減少傾向にあり、2014年は2,095トンと推定された。明瞭な再生産関係は認められない。資源水準は、1970年以降の漁獲量の最小と最大の間を三分した値を基に、漁獲量1,800トンに相当する資源量4,300トンを高位と中位の境界、漁獲量1,200トンに相当する資源量2,900トンを中間と低位の境界とし、2014年の資源水準は低位と判断した。動向は直近5年間(2010～2014年)の資源量の推移から横ばいと判断した。資源水準の低位と中間の境界となっている資源量2,900トンを当面のBlimitとした。2014年資源量はBlimitを下回っている。





管理方策

本系群の資源量はBlimitを下回る状態であるため、漁獲圧の低減によって5年後に資源量を中位水準に回復させることを管理目標とし、これを達成する漁獲係数(Frec)を管理基準として2016年ABCを算出した。ABC以外の管理方策として、漁獲規制サイズ(現在20~35cm)の見直しや、再放流魚の生残状況の把握が必要である。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合(%)	2016年ABC(トン)
Frec	Limit	0.48	35	700
	Target	0.38	30	590

- ABC算定には規則1-1)-(2)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値(漁獲係数)による漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量。Ftarget = α Flimitとし、係数 α には標準値0.8を用いた
- ABCは1トンの位を四捨五入
- F値は2歳の漁獲係数
- 漁獲割合は2016年のABC/資源量

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 2014年の資源量は2,095トンで、Blimit(2,900トン)を下回っている
- 加入資源の有効利用の観点からも、親魚資源の確保の観点からも、現状の漁獲圧は高いと判断される

管理方策のまとめ

- 漁獲圧の低減によって5年後に資源量を中位水準へ回復させることを管理目標とした
- 漁獲規制サイズ(現在20~35cm)の見直しや、再放流魚の生残状況の把握が必要である

執筆者: 上原伸二・井関智明・八木佑太

資源評価は毎年更新されます。